



Title	カール・バルト研究 : 絶対的逆説の神学 [全文の要約]
Author(s)	宇都宮, 輝夫
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7126号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/81469
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Teruo_Utsunomiya_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名：宇都宮輝夫

学位論文題名

カール・バルト研究 — 絶対的逆説の神学 —

本論文は、三つの章からなる。まず第一章は、彼の聖書解釈学を切り口として取り上げている。聖書解釈学はキリスト教の教説全体からすると些末な問題に見えるが、それは聖書論、靈感論（聖霊論）、啓示論そしてキリスト論そのものと直結しており、キリスト教の教義条項すべてと分かちがたく結びついている。バルトは、キリスト教の教説は球体のようなもので、個別は全体とつながり、全体との連関でのみ理解できるので、どの個別的な切り口からも全体へと通じていると語る。第一章では、聖書解釈学という切り口から中核的教義そのものへと進んでいく。

人類の宗教史において、啓示宗教を標榜する宗教が存在する。キリスト教もその一例であって、人間自身の力では到達不能な真理を神自身が開示すると主張する。神のこの開示行為が啓示である。しかし啓示にいかなる性質ないし機能を認めるかに関してキリスト教史では種々の論争があった。たとえば宗教改革期には、ルターは、神認識が「聖書において」、「靈感を通じて」という二つの契機によって実現すると主張したが、彼がこの二要素をあげるときには二つの具体的な論敵が念頭に置かれていた。

「聖書において」と言う時に彼が論難しているのは、天来の預言者と呼ばれたツヴィッカウの預言者たち、そして彼らの影響を受けたカール・シュタットおよびトーマス・ミュンツァーらの心靈主義的ないわゆる熱狂主義者たちである。他方、「靈感を通じて」という言葉で批判されているのがローマ・カトリシズムである。ルターは、一方では熱狂主義が聖書というこの世の人間の文書を見做して神との直接的・靈的な接近を図っていることを、他方でカトリシズムが聖書というこの世の事物の中に実体化・固定化された啓示を奉じていることを批判したわけである。ルターにとっては、熱狂主義もカトリシズムも、神と神認識に人間が自力で直接的に接近可能である点で同一種の二つの亜種にすぎなかった。彼は、聖書というこの世の事物がこの世の事物でありながら、同時にこの世と隔絶した神の啓示でもあるという絶対的逆説を固持しようとしたのである。

カール・バルトの聖書論と啓示論は、ルターのこの姿勢と完全に重なり合っており、この点は、彼の聖書解釈学を掘り下げていくと明らかになる。すなわち、彼の聖書解釈学は、一般解釈学の範囲内にある人間的作業と、靈感という超越的要素とが一体になっており、聖書論と同じ構造をもっている。その根源はイエス・キリストが神の啓示そのものであるという事態にある。すなわち、彼が人間であり同時に神であるという絶対的異質な二性の自己同一という逆説であることにある。バルトが解釈学でも聖書論でも啓示論でも固守しようとしたのは、この逆説性であった。したがって本章の

狙いは、バルトの解釈学方法論を明らかにすることを貫いて、聖書論と啓示論の逆説性を明らかにし、そしてそれが最終的にはキリスト論に由来していることを闡明することにある。

バルトが二〇世紀初頭に西洋の神学界・思想界を震撼させた処女作『ローマ書』は、当時主流であった聖書の歴史学的研究者たちからは、非学問的で主観的・恣意的な釈義であると批判された。批判の要点はほぼ一致していて、バルトは「靈的釈義」をする「歴史批評学の仇敵」であるという非難であった。この批判が当たっているなら、バルトは一六世紀の天来の預言者たちと同じ立場に立っていることになる。しかし彼はこの批判への反批判として、『ローマ書』第二版序文において自らの解釈学プログラムを詳細に展開した。そこでは、一方では歴史的批判的方法の不可欠性が主張され、他方では古来の靈感説はそれ以上の重要性をもつという矛盾とも思われる発言がなされており、彼の解釈学的言述は全体として論理整合的に解釈されることがなく、謎のまま残された。というのは、聖書が他の歴史文書と同じく歴史的批判的方法によって解釈されるなら靈感説なるものは排除されるし、逐語靈感のようなものが存在するなら歴史学的研究は不要となるからである。

バルトの解釈学に関する研究と解明は、この二律背反的状况を前にほぼ完全に停滞していたが、本論文は、バルトの解釈学に関する言述を精査し、聖書解釈の方法としてバルトは一般解釈学以外のもは考えていないことを明確に示した。

彼の解釈学的方法の第一段階は、一般解釈学の方法と変わるところがない。聖書解釈は他の一般的文書の解釈の場合と同様に、まずはテキストの言語的・文法的・文献的な文面と意味の確定である「観察」から始まる。次に個々の表現から主題を推定し、翻って主題から表現の意味を確定するという循環作業を続ける「追考」が続く。これは、言語的・文法的に確定された字面の意味するところを考え、解明する作業である。バルトによれば、キリスト教の神認識とは、聖書のこのような論理的意味連関の解明にほかならない。ということは、テキストの意味を霊が耳元でささやくといった伝統的な逐語靈感説がバルトとは無縁であることがここからわかる。

ところが最後に、バルトの聖書解釈作業には、この上にさらに「同化」と呼ばれる作業が続く。それは、追考までで得られた聖書の解釈内容を真理として受容する過程である。ここにこそ彼が「靈感」と呼ぶ事態が関わる。彼は観察・追考作業には「聖書において」という要素を、同化には「靈感を通じて」という要素をそれぞれ当てはめている。それは、一方で聖書という人間の手になる歴史文書の人間的方法による理解が不可欠であり、かつ他方ではその真理性受容のためには神的啓示が必須となるということの意味する。聖書という人間的歴史文書を無視した神の直接的啓示はなく、他方、靈感を欠けば人間的文書はただの紙とインクとなる。これによってバルトは、キルケゴールの逆説としての啓示の理解を固持しようとしているのである。すなわち、人間の言辭が人間の言辭のまま神の言葉となるという逆説、換言すれば、聖書という人間の言説は、直接的には伝達不可能であるが、聖霊を通じて真理として受け容れられるという逆説である。

キルケゴールにとってもバルトにとっても、人間の文書にして神の啓示という聖書の逆説性は、根源へとたどっていけば「人間イエスが神の子キリストである」という逆説に遡る。しかしキリスト教が理性には受容不可能な逆説であることを解消して、人間と神とを接近させようとする見解がキリスト教史に種々現れてくる。ひとまずは超越的な神啓示を認めるにしても、それが制度・書物・人物など、何らかの地上的存在に実体化・固定化されるならば、逆説は捨て去られ、人間は神への直接的通路を手に入れることになり、マックス・ウェーバーが指摘するように、教会は救済を管理し授ける制度・施設となる。この方向を進んだのがカトリシズムである。逆に、人間の存在水準を神に向かって引き上げ、神に近い位置ないし神と類似した性質を想定するならば、人間には自力での直接的な神接近が可能となる。この道を行ったのが近世では一六世紀の熱狂主義者たちであり、一八・一九世紀のプロテスタント近代主義である。ルター、キルケゴール、バルトらが固執したのは、地上の事物を通した神の間接的伝達であり、直接的伝達の否定であった。それを一般的な宗教類型の言葉で言えば、人間の自力救済性の徹底的な排除であり、神によってのみ逆説の受容が可能になるという他力救済性の固持ということにほかならない。

このように本論文第一章は、バルトの解釈学の解明を糸口として、彼の聖書論、啓示論そして最終的にはキリスト論の解明へと進み、その本質的特徴である逆説性を明らかにしている。そしてこの啓示による逆説受容こそプロテスタンティズムの原理そのもの、つまり「恵みのみ」「信仰のみ」「聖書のみ」なのである。本論文の第一章では、こういったひと連りの教義の論理的連関が明らかにされ、詳細に展開されている。

なお、バルトの聖書解釈学に関して、私は以前にすでに論文を公表している（「カール・バルトの聖書釈義における歴史的-批判的方法」日本宗教学会『宗教研究』第232号、1977年、71~95頁。電子ジャーナルとして公開されている）。そこではいまだ聖書論・啓示論に踏み込まずに解釈学の方法だけを論じているが、本書では論じなかった委細に及ぶ論点も含まれているので、あわせて読みたい。

第二章は、バルト神学の連続性を問題にしている。ウィトゲンシュタインやハイデガーのように、時とともに思想の質的变化が問題にされる場合がある。バルトの場合にも、1930年代初頭に画期となる方法的变化を遂げた（『知解を求める信仰』）とか、単一の著作において突然生じたのではないが1927年『キリスト教教義学』以降、『教会教義学』までに気づきにくい形で徐々にアナログアへの転向があったとか、1950年代半ばに神人の完全断絶という考えから転換・転向を遂げた（『神の人間性』）とか言われる。これらの説を合成するだけでも、バルトはじつに忙しい男で、二転三転、変転してやまない定見のない人物だったのかと思えるであろう。連続性問題を中心的テーマとして追求したのは、ハンス・バルタザールであり（Hans Urs von Balthasar, *Karl Barth*, Johannes Verlag, 1976）、その主著の内容は、一般にはバルト神学の弁証法からアナログアへの転向という標語によってステレオタイプ化された図式で理解されることが多かった。しかしこれには重大な疑問を感じざるを得ない。まず、第一に重要な

点は、彼はバルト神学の断絶などははなから説いておらず、むしろそれが半世紀に及ぶ長きにわたってじつに一貫していると見ていたことである。彼は断絶論者・転換論者などではもとよりないのだ。次に問題なのは、弁証法神学、新正統主義、危機神学、アナログア・フィデイなどと、バルト神学に対する種々のレッテルが考案されてきたが、レッテルには功がある反面、罪も大きい。人間はある人に貼られた「弁護士」とか「ホームレス」などといったレッテルに接しただけで、しばしばその人の人格に関して一定のイメージをいただき、それが偏見となって当の人物に関する正確な理解がさまたげられる。バルト神学に貼られたレッテルの場合でも、害が大きいのは、弁証法あるいはアナログアという概念で一体何を理解すべきか、ほとんどの人が詳細かつ正確な理解をもっていないという点にある。レッテルに幾度となく接し、それになじんできて、自分でも使っているうちに、人はいつの間にかわかったような気になっていく。しかし理解はじつは何も進んではない。ちなみに言えば、バルタザールの書は、弁証法とアナログアを論じた部分は全体の約四分の一であって、そもそもこの問題に特化した研究ではない。

こうした研究状況に鑑み、第二章は、バルトが神人の隔絶を強調する弁証法神学から神人の連続性・親近性を強調する類比の神学へと転向したというステレオタイプと化した転換論に決定的な反証を突きつけ、それを論駁し、最終的に破壊することを目的としている。

弁証法とは、一方では神と人間との関係を連続的なものとして捉えることを拒否し、他方ではそれら両者を交わることのない隔絶したものとして捉えることをも拒否する立場を指す。この弁証法は、イエス・キリストの現実に基礎を有する。というのは、イエス・キリストは、相互に絶対的に異質で断絶した神と人間とが一人格において一致し自己同一を保つ逆説的存在だからである。しかし、彼にあっては現実である神人の合一は、人間にとっては終末においてはじめて実現する約束でしかない。これがバルトが弁証法という概念で主張しようとした内容である。

他方で類比とは、神と人間とが類比的関係に立ち連続的であるという事態であるが、それは中間時においては約束であって、人間は依然として神との隔絶のうちにいる。人間における類比の成就是終末論的出来事でしかない。しかしそれは神の約束である限り、中間時においてもすでに現実的である。この類比も、神人一致の現実であるイエス・キリストの存在が中間時の人間にもたらした事態である。

こうして見ると、弁証法も類比も、一方では神人関係の隔絶を保持しつつ、他方ではその将来的一致を指し示す概念であることがわかる。両者は完全に重なり合う概念なのであるが、それではなにゆえに概念上の変化が生じたのかがひとつの問いとして浮かび上がる。じつは、これら二つの概念の推移・変化を重視したのは研究者たちであって、バルトのテキストを注意深く見るなら、バルト自身はこれら両概念を言述の中心になど置いてはいない。バルトの言述の中心にもっぱら位置しているのは、イエス・キリストという一人格のみである。この人格的現実のゆえに、神関係における人間一般の隔絶かつ一致という逆説的事態が生じているのである。半世紀に及ぶバルト神学

の展開の内部に転換や断絶を説く解釈者たちは、こうした論理連関、概念の関係を見逃している。

しかし、転換論の否定などに比べてはるかに重要、本当に重要なのは、上述したように、そもそも弁証法ということは何が理解されるべきか、アナログアということは何が理解されるべきかを正確に捉え、記述することである。この作業過程で第二章は、バルトが究極的には何を論じていたのか、何を言おうとしていたのかという最も中心的な課題と取り組んでいる。これはバルト神学の核心を解明する試みだと言ってよい。

ということは、第二章は、連続性・一貫性の論証という形をとりながら、究極的な狙いはそこにあるのではなく、バルトが真に伝えたかった内容そのものを明らかにすることにある。それをひとことで言い表せば、神人一致の福音と言える。この身もふたもないような話を言い換えるなら、人間に突きつけられた否定的判決と、未来の積極的な希望ないし約束ということになる。第一章に関して言ったのとまったく同じことが、ここでも当てはまる。第一章における解釈学や神学の方法論など、じつは副次的関心事でしかない。そうした議論を貫いてバルトが目指していたものは、キリスト教の核心中の核心、「イエスはキリスト」という絶対的逆説の理解であり展開である。第一章と同様、第二章も、この点にかかわるバルトの思考の筋道を執念深く追っていく試みである。

弁証法と類比の両概念はキリスト論と一体、というよりキリスト論の言い換えであり、もし両概念の含意が異なるのであれば、キリスト論と人間理解とに関してバルト神学に決定的な相違が生じたという帰結にいたらざるをえない。しかし、「後期」バルトでも、人間を神に向かって、あるいは神を人間に向かって接近させる傾向は微塵も見られない。存在の次元で、創造者と被造物との無限の質的差違はなんら解消されてはいないし、また罪人の自己義認、すなわち自己救済の可能性は認められておらず、信仰義認の宗教改革的原理は固守されている。認識の次元でも、バルトが自然神学の方へと転換したかのような言説はまったく存在しない。そもそも、こうした変更がなされていたとするなら、その震源はキリスト論そのものにあるのでなければならない。イエス・キリストは、全面的に人間であり、かつ全面的に神であって、絶対異質の自己同一という逆説性にはいささかの割引もなされておらず、四世紀のアタナシオス以来の両性論は揺らいでいない。キリスト論上の二大異端類型である（人間を神格化する）エビオン主義も（究極的には神人の真の一致を否定する）仮現論も、まったくその痕跡を見出し得ない。第二章ではこうした確認が精密な文献的裏づけをもって明確に指摘されている。

第一章も第二章も、表面の議論に目を奪われていると、無味乾燥な論理の展開に見えよう。バルトも『教会教義学』第一巻第一分冊と第二分冊を公刊したとき、読者から極端に無味乾燥になったと言われた（『バルト自伝』）。どこを読んでそのような感想をいただいたのかと不思議に思う。『教会教義学』第一巻から第四巻までを通じて、いな全著作を通じて、バルトが一貫してしがみついて離さなかったのは、イエス・キリストの絶対的逆説性であった。

先行する二章がバルト神学の思想史的研究であるのに対して、第三章は研究の視点がやや異なり、一八世紀以降に登場してきた近代プロテスタント神学の生成と特徴に関するバルトの見方を歴史学的・社会学的視点から検討したものである。研究対象とした主要テキストは『一九世紀プロテスタント神学史』である。バルトのこの著作は、あくまでも神学をしているという自覚のもとで書かれており、実際それはその通りである。それは十分理解しているものの、それでもまず、何よりも目を引くのは、彼の歴史を見る際の独特な見方であり、そこから見て取られる一八世紀近代神学を見る彼の慧眼である。

具体的に第三章の内容とその狙いを見ていく。一八世紀以降のプロテスタンティズムは啓蒙的近代主義へ転換していったが、その歴史が逆説の神学というバルトの視点からはどのように見られているのかという歴史学的問題を、この章は追求している。まず、バルトにあっては、近代主義プロテスタンティズムは熱狂主義の系譜を引くものと捉えられている。バルトによれば両者は、近代的学問性と心霊主義という一見正反対に見えるものの、ともに自らが天に向かって上昇しうる人間という根本姿勢をもっている限り、同根である。これは歴史学者エルンスト・トレルチの見解でもあるが、バルトはこれを精細に根拠づけながら論じている。ここで注目すべきは、近代史の動きを見るバルトの基本的な見方である。彼の見方に従えば、経済などの現実生活の営みにおける科学的技術的な進展が最根底の動きとしてあり、それに呼応する形で政治的・制度的・文化的変動が生じ、その上でそれに対応した変化が思想史・観念史上に起こり、それを後追いつする形で神学の変化が起こる。つまりバルトは、神学史を神学の流れ自体として単独に見るのではなく、時代と社会の流れ全体の中に置いて、それとの相関で理解しようとする。しかも時代の変動として彼が考慮に入れている諸要素は、じつに多岐にわたる。純然たる歴史学の研究、社会学的視点から見た周到なプロテスタント史と言っても過言ではなく、この研究の周到さは驚くべきものである。

こうしたバルトの近代プロテスタント史に即してではあるが、筆者は社会史研究の視点に立ちながら、バルトを越える形で独自の社会学的評価を加え、プロテスタンティズムを動かしていった諸々の動因を摘出している。これは、第三章の注目すべき成果である。

このように第三章は、直接的には、バルトが近代プロテスタント史をどのように見ているかという歴史学的問題の追及であるが、この問題探求の根底にあるのは、バルトがキリスト教の絶対的逆説性をあくまでもキリスト教の本質的モチーフとして主張しようとしていたという指摘である。バルトの見方では、近代プロテスタンティズムは、人間の半ば全能性を信じる啓蒙的合理主義の時代潮流に棹さして、神性への直接的上昇を企てた試みであった。しかしその試みは結局成功しなかった。それはキリスト教のもつ逆説性が除去し得ない躓きとなって近代主義的プロテスタンティズムの行く手を阻んだからである。要するに、第三章の根本の目的は、先行する二章と同様、バルトがキリスト教のアイデンティティとも見なしたその逆説性を明らかにすることにあつたのであり、それが本章で明確に浮き彫りにされている。